

《研究ノート》

フィリップ・アロット『ユーノミア』における国際社会の文化について

鈴木 淳 一

はじめに

- 1 アロットの社会論の概要
 - 1-1 人間の意識の重要性
 - 1-2 社会の意識と自己秩序化
 - 1-3 社会の基本構制の機能
 - 1-4 社会の単一性への志向性・全体性・自己超越性
- 2 アロットの文化概念の概要
 - 2-1 社会の精神としての文化
 - 2-2 社会における文化の特性
 - 2-3 全体性の精神としての文化
 - 2-4 自己超越の精神としての文化
 - 2-5 自己判断の精神としての文化
- 3 国際非社会における文化的空白とグローバルな資本主義
 - 3-1 国際非社会における文化的空白（国際非文化）
 - 3-2 国際非社会における文化的空白を充たす資本主義という偽文化
- 4 国際社会の治療としての意識の変化と国際文化の可能性
 - 4-1 意識の力と国際社会の再認識
 - 4-2 国際社会の文化の可能性
- 5 アロットの文化概念の批判的考察
 - 5-1 アロットの国際社会論について
 - 5-2 アロットの文化概念について
 - 5-3 文化とグローバルな資本主義の関係について

おわりに

はじめに

フィリップ・アロットの名を世に知らしめた著書『ユーノミア』⁽¹⁾は、詩的・散文的な多くの繰り返しと、同一または類似の言葉が様々な文脈によって用いられる特殊な文体のため、難解な書物である。本稿の目的は、この『ユーノミア』においてアロットが示した文化概念について説明をし、さらに若干の考察を加えることである。

アロットの議論は、①社会の意識⁽²⁾や基本構制⁽³⁾等の独自の用語や概念を用いて社会の成立に関する一般的な理論を説明し、②それらに照らして国際社会が社会として成立していない理由を説明し、③国際社会のかかえる問題への対処法として、国際社会が社会として自らを再認識することによって、国際社会が成立する可能性を提示している。しかしながら、本稿ではそういった国際社会の成立の問題に主眼をおくことはせず、「文化」(culture)についてとりあげたい⁽⁴⁾。

(1) PHILIP ALLOTT, EUNOMIA (paperback ed. 2001) [hereinafter EUNOMIA] (同書の邦訳は『ユーノミア』(尾崎重義監訳、2007年))。本稿では原則として同邦訳を用いるが、一部訳語をあらためたところがある。引用にあたっては煩雑さを避けるために引用符を使用しない箇所がある。また引用にあたってはパラグラフ番号を用いるが、同番号が存在しない前文等については原書と邦訳のページ番号を示す。さらに原著者による強調箇所については下線によるものとし、本著者による傍点の強調とは区別する。原典中で複数の英単語が一つの概念を指し示すものとして用いられている場合には、邦訳と同じく、原則として山括弧(〈 〉)でくくった。

アロットによる『ユーノミア』以外の著作としては、以下のものがある。THE HEALTH OF NATIONS (2002); TOWARDS THE INTERNATIONAL RULE OF LAW (2005); INVISIBLE POWER (2005) [hereinafter POWER 1]; INVISIBLE POWER 2 (2008) [hereinafter POWER 2]。本稿では専ら『ユーノミア』について扱う。

(2) 社会の意識については、後述1-2を参照。

(3) 基本構制については、後述1-3を参照。

(4) 著者は、『ユーノミア』に関する研究論文をこれまで発表してきている。すなわち

本稿で文化をとりあげる理由は、同概念が次の意味でアロットの主張の根幹部分に関係すると考えるからである。すなわち、①アロットの主張の中で文化は社会の構造またはシステムに還元しきれない特別な存在（アロットはそれを「精神」⁽⁵⁾と呼ぶ）として位置づけられていること⁽⁶⁾、②アロットはその社会の分析において、様々な社会や個人という本来は異なる対象について、意識・心・構造・システム・生成・基本構制といった同一の説明概念を用いている。それらの分析概念の中でも文化は包括的にこれら全ての対象に関わり、影響を与えるものであること⁽⁷⁾、③アロットによる文化の理解は、社会の生成や変遷に影響を与え且つこれらから影響を受けつつも、社会の生成からは概念上区別され、自律性と継続性を有するものとして位置づけられていること⁽⁸⁾、④今日の国際社会の社会としての不成立を説明するにあたり、国際社会において中央集権的権力の不在や国際社会を成立せしめる国際的な意識の欠落⁽⁹⁾の結果として、国際文化の欠落とその文化的空白をグローバル化した資本主義が埋めてい

①国際法と国内法の関係の視点からアロットの議論を紹介したものとして、拙稿「伝統的国际法の国内法補足的性質について——武力紛争法・国際人道法を例として——（一）～（三・完）」獨協法学49号73-101頁（1999年）（以下「補足的性質1」という。）、獨協法学52号105-149頁（2000年）（以下「補足的性質2」という。）、獨協法学54号79-146頁（2001年）（以下「補足的性質3」という。）を参照。②道徳を含む国際社会の様々な規範についてアロットの議論を紹介したものとして、拙稿「個人を規律する国際法と国際社会の道徳——国際秩序における非拘束的規範の必要性について——」獨協法学61号123-216頁（2003年）（以下「道徳」という。）を参照。

(5) 精神については、後述2-1を参照。

(6) 後述2-1を参照。

(7) 後述2-1を参照。

(8) 後述2-1を参照。

(9) アロットは国際社会が「社会」ではないとし（後述3-1を参照）、国際社会の正常化のためには国際社会を社会として再認識するという「心の中の革命」こそが必要であると説くが（後述4-1を参照）、この限りにおいて、アロットは国際社会の秩序成立の本質的問題として、「心」や「意識」を位置づけており、国際社会の不成立の本質的原因として国際文化の欠落の影響は多大であると考えられる。

ることを指摘していること⁽¹⁰⁾、以上のためである。

さらに今日の文化をめぐる問題の一つに文化と経済⁽¹¹⁾の関係がある。アロットは、『ユーノミア』の後半部分の17章で「国際経済」、18章で「国際文化」と題する章をそれぞれ置いている。この経済と文化の問題は、今日の国際社会を考える上で重要な問題であり、これらの章ではグローバルな資本主義に代表される経済がいかに国際社会や下位諸社会の文化を侵食してきたかについての説明をしている。

このようなアロットの説明は文化と経済の関係の思索的検討となろう。それゆえ本稿は資本主義が文化をどのように侵食したか（しているのか）についての哲学的・思弁的分析の試みともなる。

本稿では、1でアロットの文化概念の前提となる社会の成立と生成に関する社会論を説明し、2でアロットの文化概念を説明し、3で国際社会において文化が存在しないことの説明をし、4で国際社会の文化の再獲得の可能性について説明する。これらをふまえて5ではアロットの主張の批判的検討を行う。

1 アロットの社会論の概要

本章では本稿の問題意識に関係する限りでアロットの社会論を簡単にまとめておく。①アロットの議論は個人や社会が「心」や「意識」を有しており、社会の秩序化にあたって社会自らがそのあり方を正しく認識することが重要であるとし（本章1-1及び1-2）、②社会の成立は自己秩序化や基本構制等の概念によって説明できるとし（本章1-3）、さらに③このようにして成立した社会においては社会としての単一性への志向性や全体性や自己超越性が実現されているとする（本章1-4）。

(10) 後述3-2を参照。

(11) 経済とは、人間の意志と行為を通じて〈人間の世界〉（すなわち物理的世界と意識の世界）を変容させる社会の構造システムのことをいう。EUNOMIA, paras.6.62, 20.28.

1-1 人間の意識の重要性

アロットは、人間の心 (mind) や意識 (consciousness) の作用を重視する⁽¹²⁾。この人間の意識には認識されるものと認識されない無意識 (unconsciousness)⁽¹³⁾とがあるが⁽¹⁴⁾、いずれの意識も自らの中に〈意識によって作られた現実〉(reality-made-by-consciousness)を形成する。すなわちアロットは、〈存在するものすべての総体〉(totality of the all-that-is)⁽¹⁵⁾を、意識が認識し、自らの中に〈意識によって作られた現実〉を形成するとする⁽¹⁶⁾。

これらの意識は言葉 (words) によって表現される。

「人間の言葉に依拠した生 (life) が営まれる現実こそが、生そのものの世界である。我々の言葉は、我々の世界を創る。数ある言葉の中から我々が一つの言葉を選び出すことは、生の一つのかたちを選び出すことである。すなわち、我々が一つの言葉を選び出すことは、一つの世界を選び出すことである。ある言葉を否定することは、生の一つのかたちと一つの世界を否定することである。使用する言葉を換えることは、生の一つのかたちと一つの世界を変化させることである。新しい言葉 (既存の言葉の再定義を通して常に新たに創造される言葉も含む) を集団の内

-
- (12) アロットは心と意識について「脳が自らに対して提示するような種類の活動」であると、両者を同義で用いている。Id. para.1.13. しかし、これらと後述する精神とは異なる概念である。精神については、後述 2-1 を参照。
- (13) 無意識的態様とは、脳の活動の脳自身に対する提示が最小限である状態をいい、本能や反射神経や感覚などの生理現象に最も近いため自己注視が最小限である状態を指す。Id. para.1.15.
- (14) 意識及び無意識の生成は、〈意識によって作られた現実〉の内部において並行的に再構築される。Id. para.3.10.
- (15) 〈存在するものすべての総体〉の概念は、意識に認識された世界と物理的世界を含む。Id. para.5.33. それゆえ〈存在するものすべての総体〉は、人間の意識を包含し且つそれを超越する。Id. para.18.3.
- (16) Id. para.18.3. ただし、アロットは〈意識を超越した世界〉の存在を否定せず、文化はこの〈意識を超越した世界〉へと向かう意識の特徴を示すとする。後述 2-5 を参照。

部で選び出すことによって、我々は新しいかたちの社会的生、新しい社会的世界を創り出すことができる。新しい言葉を創り出すこと、また既存の言葉の意味を変化させることは、新しい様々な現実を存在可能にすることである。」(傍点による強調箇所は本著者)⁽¹⁷⁾

言葉を用いることによって、①意識が自らの意識を自分自身に対して提示することができ、②社会集団の内部で、人と人との関係において、言葉を共有することで、他者との間で意識を共有することができる⁽¹⁸⁾。

人間の意識を考える際に重要な働きをする概念は「観念」(idea)⁽¹⁹⁾である。

「我々人間の有する観念が、我々自身の作り出す現実の一部となっている、ということも、我々は同様に知っている。人間の有する観念は、人間にとって意識の一部であり、それゆえ、我々人間の意識の中にあっては人間にとっての〈存在するものすべて〉の一部を構成している。人間は、観念を創り出すことによって、我々人間にとっての現実を創り出す。我々人間は、我々自身の現実を創り出すことによって、我々の意識を創り出す。こうして、我々人間は、我々の意識を創り出すことによって、我々自身を創り出す。」(傍点による強調箇所は本著者)⁽²⁰⁾

それゆえ、我々は、我々自身の観念を生み出し秩序化することを目指して我々の想像力⁽²¹⁾と我々の理性⁽²²⁾を駆使することで、意識の世界を作り出す⁽²³⁾。人

(17) *Id.* para.1.11.

(18) *Id.* para.1.9. 言葉が社会の秩序化において果たす役割については、後掲注(10)を参照。

(19) 観念とは、意識内部にある複数の構成単位を集合させたものであり、ある観念が意識内部に対して有する効果は、同観念の構成単位が個々に生み出す効果の総和と比較して、より大きなものとなる。*Id.* para.2.2.

(20) *Id.* para.2.37.

(21) 想像力とは、森羅万象について様々な概念を創出する能力をいう。*Id.* para.18.4. 想像力は、心の持つ創造的な側面をいい、心自らを材料として新しい心を創出し、そして、その連結と構制と調整とを通じて、意識過程の内容物を提示する。*Id.* para.1.14.

(22) 理性とは、様々な概念を秩序化する能力をいう。*Id.* paras.2.8, 18. 4.

(23) *Id.* para.20.2.

間は、自らの意識が作り出した世界の中で生きていることとなる⁽²⁴⁾。

人間の意識はこれら様々な観念を関連付けて統合するが、その際には過去・現在・未来という時系列による分析の枠組みに対応した①起源の座標軸 (genetic co-ordinate)⁽²⁵⁾、②現実の座標軸 (actual co-ordinate)⁽²⁶⁾、③可能性の座標軸 (potential co-ordinate)⁽²⁷⁾という三つの視点から観念を分析しその統合を行う⁽²⁸⁾。

意識は、我々が行動をとる前に、我々に対して実際に行うことができる選択肢の集合体である可能態 (possibilities) を提供する。さらに〈意識によって作られた現実〉においては、意識は、これらの可能態の中から選択し行為することによって、可能態を現実態 (realities) とする⁽²⁹⁾。

1-2 社会の意識と自己秩序化

アロットは、社会 (society)⁽³⁰⁾が、物や状態ではなく、「過程」(process) であるとする⁽³¹⁾。アロットによれば、社会やその規範は、過去から未来への社会の連続した過程の中に存在し、常に自己超越 (self-surpassing) を続けるため、社会過程は「生成」(becoming) するとされる⁽³²⁾。アロットは、社会の

(24) *Id.* para.19.2.

(25) 起源の座標軸とは、ある観念を、同観念を生み出した意識の構成単位に関連付けることをいう。*Id.* para.2.26.

(26) 現実の座標軸とは、ある観念を、他の既存の諸観念に関連付けることをいう。*Id.* para.2.26.

(27) 可能性の座標軸とは、観念を、様々な可能態 (観念の可能性を含む) と関連付けることをいう。*Id.* para.2.26.

(28) *Id.* para.2.26.

(29) *Id.* para.3.8.

(30) アロットにとって社会とは人間の集団的自己創造のことである。*Id.* paras.1.1, 1.3.

(31) *Id.* para.3.1.

(32) アロットは生成について「生成とは、常に自己を超越することであるが、また自己を超越することでもある。」(下線による強調箇所は原著者) とする。*Id.* para. 6.10. それゆえアロットは生成と自己超越を同義で用いているといえる。

本質を、人間の集団的な自己創造 (collective self-creating)⁽³³⁾であるとする⁽³⁴⁾。

アロットの社会論の特徴は、個人ばかりか社会についても「社会の意識」(social consciousness)や「社会の心」(social mind)があると想定することである。アロットにとって社会とはそのような社会の意識である「公共心」(public mind)⁽³⁵⁾が、社会を自己観照し、自己創造することで形成されるとする⁽³⁶⁾。

アロットによれば、社会の意識は、それを構成する個人の意志及び行為を統合したものである⁽³⁷⁾。それゆえ社会の意識はその構成員たる個人の意識の派生物であり、個々の意識は独立しているものの相互に関連する。

「個人の観点から見ると、特定の個人に帰属しその人の身体と結合している意識が、意識の第一次的でそれ以上還元できない単一体である。それに対して、社会の意識は派生物であり集積物であり合成物である。所与の社会の視点からすると、当該社会に帰属点をもつ意識が、意識の第一次的な単位であり、社会の構成員の意識は、その統一性(つまり社会)における多様なのである」⁽³⁸⁾

社会では同社会の構成員や下位諸社会との間で意識が共有されている⁽³⁹⁾。社会によって共有されている意識の中には、秩序化を行う意識である「理性」⁽⁴⁰⁾も含まれているため、社会は意識を秩序化する意識も共有する⁽⁴¹⁾。このように社会の意識である理性によって、社会の秩序化が行われる。

(33) *Id.* paras. 1.1, 3.1. アロットは、「社会の自己創造 (society self-creating)」と「社会の社会化 (social socializing)」とを、ほぼ同義に用いているようである。*Id.* paras. 6.60, 10.3.

(34) *Id.* para.1.1.

(35) 公共心とは、社会の普遍的な意識のことをいう。*Id.* at xxv (『ユーノミア』32頁。)

(36) *Id.* para.9.14.

(37) *Id.* para.12.12.

(38) *Id.* para.4.31.

(39) *Id.* para.9.2.

(40) 理性については、前掲注(2)を参照。

(41) *Eunomia*, para.2.1.

社会は、個人の意識と同様に⁽⁴²⁾、社会自身の意識の世界⁽⁴³⁾を創造するために、〈存在するものすべて〉からなる現実を、言葉⁽⁴⁴⁾・観念⁽⁴⁵⁾・理論⁽⁴⁶⁾・価値⁽⁴⁷⁾を用いて、〈自らにとっての現実〉(reality-for-itself)という意識の世界に変容させる⁽⁴⁸⁾。

このようにして社会の意識によって意識の世界が作られ、さらにこれに基づいて世界の現実が作り出されることとなる。これを「現実形成」(reality-forming)という⁽⁴⁹⁾。アロットは、意識が作り出す世界として、①物理的世界、②社会的世界 (social world)⁽⁵⁰⁾、③個人的世界の三種類をあげる⁽⁵¹⁾。

(42) 個人の意識については、前述1-1を参照。

(43) 意識の世界は、宗教、神話、哲学、歴史、芸術、自然科学、経済、道徳などの観念構造体 (idea-structures) を含む。EUNOMIA, para.15.4.

(44) 言葉については、前述1-1を参照。

(45) 観念については、前掲注(19)を参照。

(46) 理論とは、観念の構造体であり、その役割とは、ある観念を説明するにあたり、それが理論からの推論の必然的帰結として導出されるとすることで、同観念を説明することである。EUNOMIA, para.2.45. アロットは理論の類型として、①実践理論 (人が行為を意志するときの基礎となる一団の諸観念)、②純粹理論 (実践理論を説明するために用いられる一団の諸観念)、③超越理論 (純粹理論を説明するために用いられる一団の諸観念) の三種類をあげる。Id. para.2.49.

(47) 価値とは、意識が、観念と行動との間を仲介するために用いる観念である。価値は、複数の可能態の中から一つを選択するにあたり、その選択の根拠として用いられる観念である。Id. para.3.27.

(48) Id. para.15.4. 社会は〈自らにとっての現実〉において、自らが存続し繁栄することを目指すため、〈自らにとっての現実〉は理想的現実 (ideal reality) である。Id. para.2.25.

(49) Id. para.6.4. 社会の意識による現実形成は、意識に対してばかりか、意識と無意識との関係に対しても作用する。Id. para.9.4.

(50) アロットは「人間世界」(human world)、「人間社会という世界」(human social world)、「人間社会という現実」(human reality)、「(世界の) 社会的現実」(social reality) を「社会的世界」とほぼ同義に用いている。

(51) Eunomia, para.19.2.

これら意識が作り出した世界の一つである社会的世界において、①人間は、エネルギーを同社会の様々な構造 (structure)⁽⁵²⁾及びシステム (system)⁽⁵³⁾に対して投入する方法を見出してきたのであり、②同構造及びシステムによって、人間の生存と繁栄に寄与するものと意識が認めた諸目的に奉仕するように意識の秩序化が再現された⁽⁵⁴⁾。

このため社会は、自らを組織化し、且つ、変遷させていく「自己秩序化」(self-ordering)を行う組織として想定されている⁽⁵⁵⁾。

社会は以下の意味において本性上 (by its nature) 自己秩序化を行う存在である。すなわち①社会は、構造でありシステムであるものとして自己創造しており、この構造であり且つシステムであることが継続的な秩序化の過程となる⁽⁵⁶⁾。②社会の社会化は〈社会過程の総体〉の格闘 (struggle of the total social process)⁽⁵⁷⁾を通じて行われ、社会の様々なディレンマ⁽⁵⁸⁾を解決しようと努めるのであるから、秩序化である⁽⁵⁹⁾。③社会は自らの基本構制⁽⁶⁰⁾を形成し、とりわけ法的関係という形態で社会の力を創造するため、これらは自己秩序化

52 構造によって、無形式の状態が克服され、形式が与えられる。Id. para.10.12. アロットは構造の概念をシステムの概念と対比して用いているが、構造は全体性に焦点があてられている。構造を記述するためには、①その構成要素 (constituent elements) を列挙することと、②構成要素の相互関係が記述されることが必要であるとした。Id. para.10.5.

53 システムによって、無目的が克服され、目的を与えられる。Id. para.10.13. アロットはシステムの概念を構造の概念と対比して用いているが、システムは変容能力に焦点があてられている。システムを記述するためには、構造の記述に加えて、その構成要素間の相互作用の記述がなされねばならない。Id. para.10.5.

54 Id. para.19.2.

55 Id. paras.15.2-15.6, 20.22.

56 Id. para.15.2.

57 〈社会過程の総体〉については、後述 1-3 を参照。

58 社会のディレンマについては、後掲注90を参照。

59 EUNOMIA, para.15.2.

60 基本構制については、後述 1-3 を参照。

である⁽⁶¹⁾。④社会の意識はそれ自身が、社会の自己秩序化である。この理由は、社会は、〈存在するものすべて〉からなる現実を、言葉・観念・理論・価値を用いて、〈自らにとっての現実〉という意識の世界⁽⁶²⁾に妥容させているため、意識により作られた世界は、秩序化しつつある世界となり、相対的に秩序ある世界となっているからである⁽⁶³⁾。⑤社会がその未来を現実化するにあたって、社会のシステムは、社会自らが自己認識した可能態の方向に向けて社会の生成がなされるように秩序づけており、未来を選択するということは、その選択した未来の観点から現在及び過去を秩序づけることである⁽⁶⁴⁾。

このように人間の意識は様々な社会制度を構想し実現しさらには変革する力を有する。すなわち①人間は、人間の心の力を使って、様々な制度を含んだ人間世界 (human world) を創り出す。そして、思考が創出したものを、新しい思考によって新しく作り変えることができる⁽⁶⁵⁾。②人間は、社会の意識を用いて、自然界や個人の自己意識という現実を創造した他に、人間社会という現実 (human reality) を創造した⁽⁶⁶⁾。③社会の意識は、有形的にも無形的にも存在する⁽⁶⁷⁾。④社会の意識の有形的存在とは、意識が永続的に保持されるように作られた全ての形態のことをいう⁽⁶⁸⁾。⑤社会の意識の無形的存在とは、人間の心の中にある存在であり、そこにおいて当該現象は生命を有しており、劇的な効果を引き起こす原因として作用する⁽⁶⁹⁾。

社会的現実は、人間〈自らにとっての現実〉である。アロットはこれを「我々

(61) EUNOMIA, para.15.3.

(62) 意識の世界については、前掲注(43)を参照。

(63) EUNOMIA, para.15.4.

(64) *Id.* para.15.5.

(65) *Id.* at xxvii (『ユーノミア』35頁。).

(66) *Id.* para.2.43.

(67) *Id.*

(68) *Id.* アロットは、意識の有形的存在の例として言語、書籍、工芸作品、式典・儀式・記号・象徴、現代の電子メディアをあげる。

(69) *Id.*

とは、すなわち、我々が思惟するところのものに他ならない」と表現している⁽⁷⁰⁾。このようにして、アロットは社会が自己創造すると考えている。

1-3 社会の基本構制の機能

社会の自己秩序化は、同社会の構造とシステムを自ら構築する自己構制 (self-constituting) という形態で行われる⁽⁷¹⁾。すなわち、社会の構造及びシステムは、それ自身の構造及びシステムを自ら創出することで、社会自身を作り出し、さらに自らを作り直してもいる⁽⁷²⁾。このように社会は自己構制する。

社会による自己秩序化の方法について、アロットは「基本構制」(constitution) という概念を用いて説明している⁽⁷³⁾。ここで社会の基本構制とは、時間と空間という枠組みの中で、社会自らを構造であり且つシステムであるものとしてみなす、社会自身の観念をいう⁽⁷⁴⁾。アロットによれば、社会は、個人の人格に相当するものとして、それぞれに固有な基本構制を有する⁽⁷⁵⁾。

「基本構制はそのすべての形態において、社会の自己秩序化の不可欠な一部である。基本構制は、社会が自らを一つの全体的な構造及びシステムとして秩序化する際に、社会の自己秩序化の帰結を受け入れ、内部化し、保持することができる。社会は、その基本構制の中に自らが見出す、自己の意志に基づく秩序に服することができる。」⁽⁷⁶⁾

(70) *Id.*

(71) 人間社会は、諸観念を通じた自己構制化がなされる過程であり、これらの観念は言葉という形式で伝達と蓄積がなされる。*Id.* at xxix (『ユーノミア』37頁)。

(72) *Id.* para.9.14.

(73) constitution概念は、通常「憲法」と訳出されることが多いが、アロットは社会が構造であり且つシステムである社会の基本骨格を示す特別な言葉としてこの語を用いており、本概念が持つ固有な意味を表現するため、『ユーノミア』の邦訳では「基本構制」という訳語をあてている。『ユーノミア』611-612頁。本稿でも邦訳に従って「基本構制」と訳出する。

(74) *EUNOMIA*, para.20.13.

(75) *Id.* paras.9.1-9.5

(76) *Id.* para.9.31.

アロットのいう基本構制は、法的な意味での「憲法」に限定されておらず、社会のあらゆる基本構造やシステムの総体を示す概念である。アロットは、基本構制の議論を通じて社会の現実形成全体をとらえるように、法過程や政治過程ばかりか、自然界との関係を含めて、それらの相互作用・発展・変遷を含む統合的・一般的な社会理論の構築を試みている。

アロットは、社会の有する基本構制を、①「現実的基本構制」(real constitution)⁽⁷⁷⁾、②「法的基本構制」(legal constitution)⁽⁷⁸⁾、③「理想的基本構制」(ideal constitution)⁽⁷⁹⁾に三分する⁽⁸⁰⁾。

これら、三つの基本構制は、いかなる社会においても不可欠であり、相互に作用しつつ社会の生成過程を構成することとなる⁽⁸¹⁾。すなわち、社会は、三つの基本構制の下で、その目的を達成するために、同社会に存在する「自然の力」(natural power)⁽⁸²⁾を「社会の力」(social power)⁽⁸³⁾へと変容させ、同時

(77) 現実的基本構制とは、社会が今まさに意志及び行為し、社会の可能態を現実態へと創造する基本構制である。それゆえ現実的基本構制は、ある特定の社会で行われる社会過程において、権力の配分を含めた社会の資源配分の現下の構造及びシステムを示す。Id. paras.9.6, 9.8-9.9.

(78) 法的基本構制とは、法によって社会を秩序化する基本的な構造及びシステムをいう。Id. para.9.7. 法的基本構制は、現実的基本構制や理想的基本構制から独立して機能し、法という形で保持された過去の社会の意志及び行為を、単一の現実態として提示している基本構制である。Id. para.9.6.

(79) 理想的基本構制において、社会は、意志することによって、想到しうる自己の複数の可能態の中から、現実の自己を創り出すことを選択している。Id. para.9.10. それゆえ理想的基本構制は、社会の未来の諸可能態を包み込む基本構制である。Id. para.9.6.

(80) Id. paras.9.6-9.10.

(81) Id. para.9.6.

(82) 自然の力とは、「自然のエネルギー」(natural energy)が、目的に結びつけられて変容したものである。Id. para.10.22. ここで「力」(power)とは、システムが、そのシステム上必要である効果を得るために用いるエネルギーのことをいう。Id. para.10.18.

(83) 社会の力とは、社会のシステムの活動から生じる力をさす。Id. para.10.19.

にその逆も行うのであり、これを「社会的交換」(social exchange)と呼ぶ⁽⁸⁴⁾。

これら三つの基本構制を統合したものによって当該社会のすべての社会過程が機能することとなるため、ここに〈社会過程の総体〉(total social process)が形成される。すなわち〈社会過程の総体〉は、三つの基本構制が示す三つの次元の統合を含む⁽⁸⁵⁾。

社会には様々な種類があるが、アロットは、家族のような小規模な社会から全人類で構成される国際社会に至るまで、あらゆる社会は「ステイト」(state)として構築することができるとする⁽⁸⁶⁾。アロットはステイトの概念を一般化して用いており、いわゆる民族国家(nation state)に限定していない。本稿ではアロットにならって、ステイトという形態によって行われる統治を一般化して〈ステイトの形態をとる統治〉と呼ぶ⁽⁸⁷⁾。ここで〈ステイトの形態をとる統治〉とは、①社会の意志及び行為が、社会全体から見れば一部分に過ぎない特定の下部システムを通じて行われ、②そのような社会の意志及び行為を行う下部システムは、社会の基本構制の下で、社会全体を代表し、社会全体の権威を伴って、意志及び行為をすることができ、③そのような下部システムの意志及び行為が、社会の意志及び行為のための公領域(public realm)による統治(governing)として認識されるものをいう⁽⁸⁸⁾。

〈ステイトの形態をとる統治〉の代表例は民族国家であるが、これに限定されるのではなく、たとえば企業、大学、労働組合等によっても同形態による統治は行われる。

さらに、これら社会は〈存在するものすべて〉の総体と個人との間にある中

⁽⁸⁴⁾ *Id.* para.10.19.

⁽⁸⁵⁾ *Id.* para.9.11. なお〈社会過程の総体〉は〈存在するものすべての総体〉の一部を構成する。後者については、前掲注(15)を参照。

⁽⁸⁶⁾ *Id.* para.13.42.

⁽⁸⁷⁾ 拙稿・「道徳」150-152頁を参照。アロットは、「ステイトの形態をとること」を指し示すための形容詞として「ステイト的」(statal)という言葉を用いている。

⁽⁸⁸⁾ EUNOMIA, paras.12.61, 13.42.

間的存在として位置づけられるため、社会の自己創造は常に外部性及び内部性を有している。それゆえ、ある社会の生成は、それ自らを構成する下位存在との間で相互作用するばかりか、同等である他の社会との関係で、さらに上位社会や〈存在するものすべて〉との関係で相互作用する⁽⁸⁹⁾。このようなあらゆる社会化に内在する創造的な緊張関係(格闘)をアロットは「ディレンマ」(dilemma)と表現している⁽⁹⁰⁾。

1-4 社会の単一性への志向性・全体性・自己超越性

このようにして成立し生成する社会はいくつかの特性を有するが、それらの中に単一性への志向性と全体性と自己超越性という特性がある。

社会は常に変化し様々なディレンマと葛藤を社会の中にも含むとしても、社会の意識・自己構制・基本構制は相互に不可分の関係にあり、社会としては一つに統合することを志向する⁽⁹¹⁾。それゆえもし社会が成立しているのであれば、

(89) *Id.* paras.3.34-3.39.

(90) *Id.* paras.4.10-4.13. アロットは社会に組み込まれたディレンマとして、以下の五つをあげる。①アイデンティティのディレンマ(社会は、他の社会との関係において、そして、同社会の構成員との関係において、自らのアイデンティティをどのような方法で保持することができるのかというディレンマ)、②力のディレンマ(社会には様々な力が存在するが、社会は、どのような方法であれば、一つの統一体として、つまり、そのすべての下位システムを包含した単一のシステムとして、機能することができるのかというディレンマ)、③意志のディレンマ(社会に相対立する複数の価値が存在する中で、社会は、どのような方法であれば、自らの選択・意志及び行為のための根拠を自らに提示しつつ、社会としての選択をなすことができるのかというディレンマ)、④秩序のディレンマ(社会は、どのような方法であれば、自らの存在のためのシステムと、〈存在するものすべて〉からなるシステムとを統合することができるのかというディレンマ)、⑤生成のディレンマ(社会は、自己創造と自己超越を絶えず行いながら、構造及びシステムとして存続することがどのような方法であれば可能となるのかというディレンマ)である。*Id.* paras.4.10, 12.50, 20.7-20.10. 拙稿・「道徳」187-196頁。

(91) アロットは、自然の単一性と価値の複数性との格闘という意志のディレンマにおい

同社会は価値の複数性というディレンマをかかえつつも、単一性 (unity) への志向性を有することとなる⁽⁹²⁾。

またアロットは社会を考えるにあたり、社会全体に統合された全体性 (totality) を強調する。たとえばアロットは次のように述べている。

「社会は、全体性をもち、統合された構造をもつ自己一貫的なシステムとして、自らの意志と行為を不断に統合して、すべての永遠のディレンマ——その全体性との関連における——との格闘を統合していかなければならない。」(傍点による強調箇所は本著者)⁽⁹³⁾

前述した通り、社会は自らを一旦成立させ確立させた後も、自らを生成し自己超越していく⁽⁹⁴⁾。人間の意識は、社会を形成すると同時に社会によって形成される。人間の意識はその意識自体ばかりか社会さえをも超越することができるが、その性質から超越しないではいられない⁽⁹⁵⁾。それゆえ社会自身も自己超越への強い志向性を有する⁽⁹⁶⁾。

ここに示された社会の単一性への志向性と全体性と自己超越性という特性は、成立した社会が獲得している特性であり、もし社会が成立していなければこれらの特性は存在しないこととなる。

て、社会は、暫定的ではあるものの価値統一体 (unities of values) を実現することが求められるとする。価値統一体は、社会の構造の中に組み込まれ、社会過程の影響を受けて変容しつつ、社会の意志及び行為に対して効果を及ぼす。EUNOMIA, para.9.28.

⁽⁹²⁾ 国際社会において単一性が損なわれていることについては、後述3-1を参照。

⁽⁹³⁾ EUNOMIA, para.9.30. 社会の全体性概念に関して、アロットは社会として成立しない国際非社会においては全体性が欠落し、その精神としての文化が存在しないとする。後述3-1を参照。

⁽⁹⁴⁾ 自己超越については、前掲注⁽⁹²⁾を参照。

⁽⁹⁵⁾ EUNOMIA, para.18.3.

⁽⁹⁶⁾ *Id.* para.6.10.

2 アロットの文化概念の概要

2-1 社会の精神としての文化

アロットは文化について、社会の心、意識、過程、構造、システムとは区別される「精神」(spirit)であるとする⁽⁹⁷⁾。アロットによれば精神とは、ある特定のものがその構造とシステムという観点から説明され尽くされた後になお必要とされる仮説である⁽⁹⁸⁾。

もちろん社会の文化も社会の〈自らにとっての現実〉⁽⁹⁹⁾が生み出す現実の一つであり、〈社会過程の総体〉⁽¹⁰⁰⁾から生み出されたものである⁽¹⁰¹⁾。しかし、社会の文化という現実が一旦生ずると、その現実は人間の意識が利用できる現実態となり、社会のあらゆる意志及び行為にフィードバックされる⁽¹⁰²⁾。さらに文化は、社会に対してばかりか、個人や同社会の外部者に対しても作用することができる⁽¹⁰³⁾。

アロットは、文化から見た社会である〈文化としての社会〉(society-as-culture)の存在と機能について、社会自らの選択によらないにもかかわらず、次のように作用すると述べている⁽¹⁰⁴⁾。①〈文化としての社会〉は社会の現実形成よりも常に先行しており、社会の意志及び行為の支配できる範囲をわずかに

⁽⁹⁷⁾ *Id.* paras.18.1, 20.30.

⁽⁹⁸⁾ *Id.* para.18.2. 構造については前掲注52を参照。システムについては前掲注53を参照

⁽⁹⁹⁾ 社会の〈自らにとっての現実〉については、前掲注48を参照。社会は、社会の永続的なダイレマと格闘するにあたり、社会〈自らにとっての現実〉を形成し、自己超越するための手段を見出す。*Id.* para.12.17.

⁽¹⁰⁰⁾ 〈社会過程の総体〉については、前述1-3を参照。

⁽¹⁰¹⁾ *EUNOMIA*, para.18.1.

⁽¹⁰²⁾ *Id.* paras.18.8, 20.30.

⁽¹⁰³⁾ *Id.* paras.18.8-18.11.

⁽¹⁰⁴⁾ *Id.* para.18.12.

超えた社会の現実である。②〈文化としての社会〉は、社会自身が自らにかざす鏡の中に写し出された自らの像である。③〈文化としての社会〉は、光によって社会の内部に作られる社会自身の影である。④〈文化としての社会〉は、社会自身が形成した現実である。⑤〈文化としての社会〉とは、常に社会よりも一歩先じた世界であろうとする性質を持つ精神の世界にすでに参加している社会である。⑥〈過程としての社会〉は、その社会の精神としての文化を、社会のあらゆる生成からの分泌物として創り出す。⑦〈精神としての社会〉である文化は、〈過程としての社会〉のそれぞれの気孔や繊維の中に分泌される。

ここで注目すべきことに、歴史や言語といった文化として通常分類されるものは、アロットの議論では社会の意識による社会過程の中にその一部が組み込まれている⁽¹⁰⁵⁾。それゆえこのような言葉や芸術や神話等に現れた「文化」は、社会過程を構成する部分と社会の精神としての部分とで重複部分が存在するが、これらの機能は厳密には区別される必要がある⁽¹⁰⁶⁾。

2-2 社会における文化の特性

社会の精神としての文化は、社会が自らの現実形成過程を通じて社会〈自らにとっての現実〉を形成する場としての「現実」を構成する⁽¹⁰⁷⁾。社会の文化の中で社会の意識は作用するため、社会過程が機能するための前提となる法則を文化は提供している⁽¹⁰⁸⁾。

(105) 言葉と意識の関係については、前述1-1を参照。たとえばアロットは言語について次のように説明している。「言語は、人間が最初に行った自己秩序化である。言語を用いることで、我々は、形をなさない混乱、目的喪失、そして分裂という恐るべき精神状態を回避することができる。言語は、〈意識によって作られた世界〉を制御するために用いる魔法の道具である。すなわち、言語は、意識によって世界を制御するために用いる魔法の道具なのである。」*Id.* para.1.25.

(106) 後述5-2を参照。

(107) EUNOMIA, para.18.14. それゆえ社会の文化は、社会の構造システムのあらゆる現実的活動が有する「形而上学的」側面であるといわれる。

(108) 社会は構造システムとして自らの存続と繁栄を実現しようとして行為するとき、自

「社会の文化の中では、人間の意識は、その社会の構造システムを、そしてその社会のあらゆる下位構造システムをただ秩序化し活動させるだけで、その社会の秩序と活動の原理を形成する。……社会は、自らのあらゆる自己創造と自己社会化を行うとき、……社会の文化に内包されている社会自身の秩序と活動に関する法則性に従って意志し行為する。この法則とは、仮に人間の意識が社会を秩序化し活動させることができるとするならば人間の意識が当然自らのために作り出していたはずだと考えられるものである（社会の精神が、形を与えられて初めてその姿を現すことを想起せよ）」（下線による強調箇所は原著者。傍点による強調箇所は本著者）⁽¹⁰⁹⁾

社会の精神としての文化が有する特性には、①社会の全体性としての精神（本章2-3）、②自己超越としての精神（本章2-4）、③自己判断としての精神（本章2-5）という異なるものがある⁽¹¹⁰⁾。

2-3 全体性の精神としての文化

アロットは、社会の精神としての文化の特性の一つに全体性⁽¹¹¹⁾をあげており、文化と基本構制の関係について全体性の観点から次のように述べる。

「社会の文化と生活は、その社会が自らの中から作り出すものすべてよ

らの存在と合致する仕方では意志し行為する。そのため社会は自らの存在を定位することが必要となり、そのための座標軸として時間と空間が用いられる。それゆえ社会は自らの存在を以下のいずれかとして認識する。すなわち、①意志し行為するもの、②自らの意志及び行為のために時間と空間を用いるもの、③（精神のように）時間と空間の中には存在しないものである。社会の文化の精神という存在の仕方は、空間軸を意味する第三次元や、これに時間軸を加えた第四次元によって位置づけられるものではないので、第五次元に位置づけられる存在となる。Id. para.18.13.

⁽¹⁰⁹⁾ Id. para.18.15.

⁽¹¹⁰⁾ Id. paras.18.2-18.8.

⁽¹¹¹⁾ 社会の全体性概念については、前述1-4を参照。

り成る全体性であり、時間及び空間を超越して存続する。この全体性の内部で、基本構制は、社会が、社会としての意志及び行為を通じて、その生成とその自己創造について責任を負っていく上で必要な形態をとつつ、社会の現実を保持している。」(傍点による強調箇所は本著者)⁽¹¹²⁾

2-4 自己超越の精神としての文化

アロットは文化が自己超越の精神⁽¹¹³⁾としての特性を有するとする⁽¹¹⁴⁾。一旦形成された社会は自己超越の精神によって、さらなる高みへと超越していく⁽¹¹⁵⁾。人間の意識が想像力⁽¹¹⁶⁾と理性⁽¹¹⁷⁾を有するため、人間の意識の中で作られる〈自らにとっての現実〉の中に、人間の意識を包含し且つそれを超越する〈存在するものすべての総体⁽¹¹⁸⁾〉が常に提示される⁽¹¹⁹⁾。〈存在するものすべての総体〉は、人間の意志及び行為を通じて作り出された世界ではなく、〈人間の意識の作り出した世界を超越する世界〉であるため、時間と空間の概念を伴わない世界である⁽¹²⁰⁾。そこにおいて意識は定住や占有ができないばかりか、そこを離れることもできない⁽¹²¹⁾。このような社会の自己超越への志向性は、自己超越の精神としての文化の特性である。

(112) EUNOMIA, paras.9.34, 18.2.

(113) 自己超越については、前掲注③を参照。

(114) EUNOMIA, para.18.3.

(115) 前述1-4を参照。

(116) 想像力については、前掲注②を参照。

(117) 理性については、前掲注②を参照。

(118) 〈存在するものすべての総体〉については、前掲注④を参照。

(119) EUNOMIA, paras.18.3-18.4.

(120) *Id.* para.18.4.

(121) *Id.*

2-5 自己判断の精神としての文化

アロットによれば社会の文化は、全体性としての精神や自己超越としての精神であるにとどまらず、自己判断 (self-judgement) としての精神でもある⁽¹²²⁾。

アロットは、その社会論において、社会の意識によって社会が自己秩序化していくことを強調する⁽¹²³⁾。しかしアロットはそのような意識の世界を超越する世界を想定しており、それを〈意識を超えた世界〉(world beyond consciousness) と呼ぶ。

「〈意識を超えた世界〉への意識は、人間のあらゆる社会化に新たな次元を導入することになる。その新たな次元とは、超相対性の視点から見た相対性の次元、すなわち判断の次元である。この次元は人間的な基準を超えた次元であり、そこでは、人間によるいかなる評価も相対的・一時的・部分的なものになる。この次元では、社会でさえ、また人間の意識でさえ、限界的・限定的・有界的 (limited, finite, and bounded) といったものに過ぎない、ということがみてとれる。この次元では、あたかも外から見渡しているかのように、社会を一つの全体として捉えることができる。社会は、仮説上、一つの構造システムとして閉じた存在と想定されている。……しかし、一方で、社会の自己創造活動はすべて社会の意志及び行為の枠の外にありながらその社会が決して無関心ではられない世界の内部で行われる活動でもある。」(下線による強調箇所は原著者。傍点による強調箇所は本著者)⁽¹²⁴⁾

自己判断の精神としての文化の働きとは、社会が意志し行為するにあたり、既存の意識の世界を超えた、〈意識を超えた世界〉を求める判断として機能することを示している。その限りにおいて、この自己判断の精神としての文化の働きは、アロットの社会の意識による意志及び行為という原則を逸脱している

(122) *Id.* para.18.5.

(123) 社会の意識による自己秩序化については、前述 1-2 及び 1-3 を参照。

(124) EUNOMIA, para.18.6.

ように見えるが、〈意識を超えた世界〉の存在は意識による社会の自己創造への批判的視点を提供する。

「社会の精神のもつ判断としての側面が我々に示唆していることは、あらゆる社会的活動を決するダイレンマ⁽¹²⁵⁾が、最終的な解決をみることなど決してなく、最終的な説明など決してすることのできない矛盾と謎と不確定要素に満ちていることである。無知の峰を一つ越えても、また新たな無知の峰が現れてくる。社会の自己判断の精神は、社会というものが必然的に、永遠に不完全で未完成なものであり、いつまで経っても発展途上段階にある、ということを示唆する。」(傍点による強調箇所は本著者)⁽¹²⁶⁾

アロットはこの人間の意識が作り出した世界である社会を超越した世界を〈社会を超越した世界〉と呼び、これを希求し完全さを求める精神としての文化の働きを「判断」と称する。それゆえ、自己判断としての精神としての文化は、現在の意識の社会を超越した理想の姿を提示する可能性があり、これは現在の意識の世界の限界を突破する究極の社会のあり方を提示する可能性がある。

「社会の自己判断の精神は、我々が、個人としてそして社会としてより完璧でより完全でより発展した状態とはどのような状態なのかについて、〈社会を超越した世界〉において認識できるようにする。特定の社会の精神的な次元——その社会自身が作り出す次元ではあるが、それを社会が自ら選び取ったわけではなく、にもかかわらずその適用を免れることができない——とは、理想の次元なのであり、すなわち、①我々の抱くあらゆる理念の中の究極の理念、②我々のあらゆる可能態の中に潜む究極の可能性、③我々のなすあらゆる自己生成の向かう方向、④我々のなすあらゆる想像の究極の源泉、そして⑤我々のなすあらゆる推論の究極の秩序、これらの次元なのである。」(傍点による強調箇所は本著者)⁽¹²⁷⁾

(125) ダイレンマについては、前掲注90を参照。

(126) EUNOMIA, para.18.7.

(127) *Id.* para.18.7.

3 国際非社会における文化的空白とグローバルな資本主義

アロットは、①国際社会は、これまで述べてきた意味での「社会」として成立していないため、文化が欠落しており(本章3-1)、②文化が欠落した隙間・空白をグローバルな資本主義が埋めているとする(本章3-2)。

3-1 国際非社会における文化的空白(国際非文化)

アロットによれば、国際社会は、自らを、国家の集合体として誤って認識しているとする⁽¹²⁸⁾。国際社会がこれまで自らを社会として認識することや、自らを自己秩序化できる社会として認識することは極めて稀であった⁽¹²⁹⁾。国際社会は、秩序をその社会目的として選択することもできなかった⁽¹³⁰⁾。

このように国際社会は、自らを、非社会的なステイトとしてみなすことを選択した⁽¹³¹⁾。それゆえ、国際社会は「社会」とはならず、ステイト間の「非社会」(unsociety)となった⁽¹³²⁾。

国際社会が社会として成立しないため、世界は国際社会と国内諸社会で分断され、制度・法・道徳についても国際社会と国内社会で分断され⁽¹³³⁾、社会の単一性はたとえ暫定的・一時的であっても実現が困難となった⁽¹³⁴⁾。

この結果、国際非社会が文化を有することはない。アロットはこの文化的空

(128) *Id.* paras.14, 13.108, 20.20.

(129) *Id.* para.15.7.

(130) *Id.*

(131) *Id.* paras.13.98, 20.20.

(132) アロットは、このように国際社会と国内社会とが分離し、国際社会が「非社会」であるのは、ヴァッテルの伝統のためであるとする。*Id.* para.13.105. 拙稿・「補足的性質1」91-93頁。

(133) EUNOMIA, para.13.105. 拙稿・「補足的性質1」91-93頁。拙稿・「道徳」155-157頁。

(134) 国際社会の単一性概念に関連して、アロットは人類が単一の社会であるべきことを

白の状態を「国際非文化」(international unculture)と呼んでいる⁽¹³⁵⁾。すなわち現今の国際社会では、その非社会的な生成に起因する非文化という空白が生じている⁽¹³⁶⁾。

国際社会の文化において、人類は自らが精神⁽¹³⁷⁾であることを認知し定位する⁽¹³⁸⁾。しかし社会ではない国際非社会の精神は歪む(distorted)。アロットは国際社会の精神としての文化の歪みについて次のように述べる。

「自らが社会であることを敢えて認めようとしなない社会では、精神を示す第五次元⁽¹³⁹⁾に必ず歪みが生じる。国際社会の歪んだ精神は、社会の構造システムのあらゆる活動に歪みを生じさせる。そうした国際社会の歪んだ精神は、社会自らの意志及び行為を無力化し、社会のあらゆる言葉・観念・理論・価値を混乱させ、社会のあらゆる生成の方向感覚を失わせ、社会の漸進的自己発展を妨げ、社会そのものを社会自らの存在にとっての阻害因子へと変えてしまう。」⁽¹⁴⁰⁾

国際社会の歪んだ非文化の結果、国際非社会は以下のような非社会としてみなされる⁽¹⁴¹⁾。①国際非社会は、自然の力が社会の力を圧倒するように見える半自然状態の世界として、人類の前に姿を現す。国際社会の出来事⁽¹⁴²⁾は、実

強調する。EUNOMIA, paras.1.4, 7.1-7.6。しかし現実の国際社会においては二元性(duality)が導入され、国内社会と国際非社会とに分離している現実を問題視する。Id. para.13.105。拙稿・「補足的性質1」92-93頁。拙稿・「道徳」155-157頁。

(135) たとえばEUNOMIA, paras.18.25, 18.26, 18.59, 20.31。

(136) Id. para.20.31。

(137) 社会の精神としての文化の作用については、前述2-2、2-3、2-4、2-5を参照。

(138) EUNOMIA, para.18.16。社会による自己存在の定位については、前掲注(100)を参照。

(139) 精神を示す第五次元とは、社会が自らの精神としての存在を位置づけるために、空間軸を意味する第三次元でも、時間軸を意味する第四次元でもなく、第五次元に位置づけることをいう。前掲注(100)を参照。

(140) EUNOMIA, para.18.16。

(141) Id. paras.18.17-18.24。

(142) アロットは国際社会の出来事の例として戦争、内戦、ジェノサイド、飢餓、伝染病、

際にはその全体または一部が人間の意識の所産であるにもかかわらず、あたかも「擬似的な気象現象」であるかのような様相を帯びているように感じられる⁽¹⁴³⁾。②国際非社会は、精神としての文化という観念を有していないため、組織化された社会の外縁にある周辺的社会、未開の辺境の地にある社会として、人類の前に姿を現す。社会化されない国際社会は、社会構造の全体性とは無縁の存在であるため、社会としての体裁をかりうじて保っている周辺的社会の日常生活にはほとんど影響を与えない⁽¹⁴⁴⁾。③国際社会では、自己超越的で自己判断的な精神としての全体性が欠落するため、社会的荒廃が、国際社会の下位社会、とりわけ諸国家社会に、伝染病のように蔓延する⁽¹⁴⁵⁾。④全体性の精神の欠落は、コントロールされていない資本主義を含むあらゆる種類の国際的肥大をもたらす⁽¹⁴⁶⁾。

3-2 国際非社会における文化的空白を充たす資本主義という偽文化

アロットは、国際非社会においてコントロールされない資本主義(capitalism)の文化が、国際非社会の非文化という空白を充たし、国際システムを支配して

圧政、搾取、あらゆる種類の社会における非人間的扱い、世界の自然環境の破壊と浪費、世界の経済環境における景気循環・恐慌・その他の大規模な変動といった現象をあげる。Id. para.18.18.

(143) Id.

(144) Id. para.18.20.

(145) アロットは社会的荒廃や墮落について次のように説明している。「社会的墮落は一度生じると次々にそれを誘発することになり、ついには、社会の現実の達成物が、もはや社会自身とその構成員の生存と繁栄ではなく、自己破壊と悲慘の増大であるような社会が作られることになる。腐敗した行政、腐敗した政治、腐敗した宗教、腐敗したイデオロギー、内紛、経済的腐敗と非効率、精神と道徳の退廃、飢饉や伝染病の流行といった社会・自然的災害、社会の外部からの政治的・社会的・経済的侵略——こうしたものが、個々の社会の現実の社会過程となり、また、かかる社会の市民として苦しむ運命を背負った個人の現実の日常生活となることもあり得る。」Id. para.18.22.

(146) Id. para.18.24.

いるとする⁽¹⁴⁷⁾。

資本主義は国内社会においてこれまで発達してきており、社会に対して圧倒的な影響力を有する。この理由は、①資本主義が所有概念を媒介として社会の力と欲望とを直接に結び付けるため、社会はその全構成員の生の衝動 (impulse of life)⁽¹⁴⁸⁾を有効に利用することができるためであり⁽¹⁴⁹⁾、②資本主義は社会の下位構造(特に、産業・商業・金融業のあらゆる種類の企業)の内部にあるエネルギーを組織化していくため、社会は大量の余剰社会エネルギー (surplus social energy)⁽¹⁵⁰⁾を生み出すことができるためである⁽¹⁵¹⁾。さらに③資本主義は、一見すると、人間の自然な欲望に直接に答えており、人間の自然な目的である生存と繁栄に奉仕していると感じさせるため、人間の意識が、資本主義を拒むことは困難である⁽¹⁵²⁾。

資本主義は国際社会で展開されるようになるが、国際社会においては国内社会とは異なり社会は存在しないのであるから、資本主義はコントロールされないままとなった。

「複雑な社会へと発展を遂げる下位社会において複雑なシステムとして成長してきた資本主義は、やがて外部の国際社会に出て行くことになった。しかし、この国際社会なるものは、資本主義を受け入れるのに適した社会ではなく、仮定上は主権国家とされる諸国家の相互作用的な公領域で構成される極小の国際社会に過ぎなかった。資本主義は元来、基本

(147) *Id.* para.20.31.

(148) 生の衝動とは、生命体が、その種に固有の組織構造の内部に含まれる一定形式の潜在的エネルギーを(引き出して)用いるという、生命体に固有の行動様式を指す。*Id.* para.3.12.

(149) *Id.* para.18.28.

(150) 余剰社会エネルギーとは、社会の構造システムの機能の所産として生じるエネルギーのうち、本来ならば分裂したままであったはずの社会構成員のエネルギーを社会が組織化していくことによって生じたエネルギーをいう。*Id.*

(151) *Id.*

(152) *Id.* para.18.30.

構制上の構造システムや法的諸関係がいつそう洗練されていき、資本主義自体の民主化・社会化を推進していくことに依存していたのであるが、しかし、国際社会においては、資本主義は、それ自身の基本構制という概念すら持たず、最も初歩的な法的関係しか持たず、自己創造を社会化する最低限の能力しか有していない社会の中に自らがいることを発見したのであった。資本主義は、いふなれば、裸のまま、ただ独り、社会ではない社会の中に、そして、文化ではない文化の中に、置かれたのである。」⁽¹⁵³⁾

国際非社会において社会化されない資本主義が示す文化は、国際社会の偽文化 (pseudo-culture) として機能するが、社会の精神としての文化となるわけではない⁽¹⁵⁴⁾。

「社会化されていない資本主義は、国際社会で、理論ではなく事実としてふるまうようになった。資本主義のための複雑な社会的基盤は、国際的平面で再現されることはなかった。国際的平面でみられたのはただ、資本主義の活動だけであった。こうして資本主義は、非文化的 (acultural) で、閉鎖的で、文化中立的 (culturally neutral) で、社会化されておらず、全くの個体 (中心) 主義的 (intrinsically individualist) であるという性質を帯びたものと見られるようになった。」⁽¹⁵⁵⁾

国際社会に現れた原始的資本主義は、過剰なエネルギーを抱えているため⁽¹⁵⁶⁾、国際非文化として下位社会の地域的な文化を変容させ破壊していった。

「こうしたおぞましい偽社会を象徴するような現象が全世界を席卷していく過程で蓄積された強力なエネルギーは、世界各地の無数の地域的特性を次々と制圧していった。こうした社会的な現象は、無数の地域的な文化を、すなわち、世界中の無数の社会の自己超越的な精神の総体を、変

(153) *Id.* para.18.58.

(154) *Id.* para.18.26.

(155) *Id.* para.18.59.

(156) *Id.*

容し、時には破壊さえしていった。①長い時間をかけて蓄積されてきた文化、②高度の複雑性を備え卓越した文化、③隔絶した地域の個性に満ちた文化、④宗教・神話・歴史・法・道徳の点で独自の形態の社会的現実を伴った文化、⑤誇り高いネーションに対して貴重な自己アイデンティティを与える文化、⑥尊厳・愛情・配慮・尊敬・責任といった深遠にして大切な人間の徳で満ちあふれた文化——こういった文化を、国際非文化という圧倒的な影響力を持った怪物は一蹴し、それにより、人間という資源を、いとも簡単にまた深い考えもなく、奴隷化し、搾取し、変化を強いてきた。」⁽¹⁵⁷⁾

アロットは社会化されないグローバルな資本主義による混乱と破壊が、全世界に危機的状况をもたらすことに警鐘を鳴らしている。

「二十世紀末の今日、国際非文化が巻き起こした大混乱に歯止めをかけるにしても、原状回復にとりかかるにしても、もはや手遅れかもしれない。グローバル資本主義は、このことについて相応の責任を負うべきである。もしグローバル資本主義が、社会的な国際社会の枠組みの中で社会化されなければ、近い将来、国際文化はなくなり、また地球上からいかなる地域文化も消滅してしまうことになるだろう。このように、社会化されざる資本主義——半・社会的な国際社会の偽文化として機能する——しか存在しない世界とは、そして、固有の土着の文化が下位諸社会に存在しない世界とは、遠い将来とは言わずすぐにでも破滅しかねない世界、物理的世界としてのみならず人間的世界としても滅亡への道が定められた世界ということになる。このとき人類は、人間的な生活という興味深い実験を可能にしてきた三つの世界——個人の世界、社会の世界、惑星地球の世界——を、自らの錯乱した行動によって崩壊させることになる。」(傍点による強調箇所は本著者)⁽¹⁵⁸⁾

⁽¹⁵⁷⁾ *Id.* para.18.25.

⁽¹⁵⁸⁾ *Id.* para.18.26.

4 国際社会の治療としての意識の変化と国際文化の可能性

アロットは、①社会として成立していない国際非社会について、社会として再認識することが可能であり(本章4-1)、②再認識された国際社会においては国際文化が開花する可能性がある(本章4-2)とする。

4-1 意識の力と国際社会の再認識

国際社会が自らもたらした混乱と破壊という「病状」に対して、アロットは処方箋・治療法を示しており、それは国際社会の自らの意識を変えることこそが重要であるというものである。

「二十世紀末の今日、人間の意識が人間の未来の生存と繁栄を脅かしている、ということができよう。しかし一方で、人間の意識は最終的には自己超越を通じて自己を現状から取り戻す可能性を有している、ということもできよう。」(傍点による強調箇所は本著者)⁽¹⁵⁹⁾

それゆえ国際社会が全人類に存続と繁栄をもたらすことのできる社会として自らを再び認識しなおす可能性が存在することとなる⁽¹⁶⁰⁾。

もし国際社会が再度自らを「社会」として認識できるのであれば、国際社会は「社会」として自らを再構制できるようになる。

「国際社会は、自らの現在の姿を再発見することによって、自らがなりたいと望む理想の姿になることができるであろう。」⁽¹⁶¹⁾

このような動きの萌芽は、すでに国際社会の中にみとることができる。

「過去五世紀間における国際社会の活動とりわけ二十世紀における国際

(159) *Id.* para.19.17.

(160) *Id.* para.20.21. 本稿の問題関心を離れば、アロットが示した国際非社会への処方箋である「国際社会の最大の問題は、国際社会が社会であることに国際社会自身が気付いていないこと」という結論の当否についても検討される必要がある。後述5-1を参照。

(161) *Id.* para.18.73.

社会の活動について、国際社会が意識の世界として誕生しようとしているがまだ誕生前であった社会の秩序化として、つまり、自らが社会であることをまだ知らなかった国際社会による無自覚的な自己社会化として、理解することが可能である。……国際社会は、自らは非社会的であったにもかかわらず、期せずして、自らの秩序化を行ってきた、ということが出来る。国際社会は、自らを誤って非社会として認識していたにもかかわらず、同時に、本能的にまたは自然発生的に社会たらんと模索する前社会的な存在であった。」(傍点による強調箇所は本著者)⁽¹⁶²⁾

それゆえ国際社会は、自らが社会であることにまだ気付いていない社会であるが、社会化を既に行っており、社会として振る舞い始めているといえる⁽¹⁶³⁾。

アロットは、もし国際社会が社会として再認識されるのであれば、グローバルな資本主義も社会化され、人類全体に一層の恵みをもたらすことを予想する⁽¹⁶⁴⁾。

「国際社会が遂に自らを社会として認識するようになれば、国際経済は、国際社会の経済的下位システムを組織することを目指す格闘といった次元をはるかに超えた、自己創造と社会化を目指す格闘の中に、自らの居場所を見出すことになろう。そのとき国際社会は、あらゆる種類の人間の価値という莫大な富、すなわち、人類が長い歴史を通じてあらゆる社会的経験の中で蓄積し、それぞれの下位社会の文化に内包されてきた人間の経験という富を享受できるようになる。」⁽¹⁶⁵⁾

4-2 国際社会の文化の可能性

アロットによれば、もし国際社会が社会となることができれば、国際社会の精神としての文化を我々は有するようになることが期待される。

⁽¹⁶²⁾ *Id.* para.15.8.

⁽¹⁶³⁾ *Id.* para.15.44.

⁽¹⁶⁴⁾ *Id.* para.18.32.

⁽¹⁶⁵⁾ *Id.* para.18.73.

「国際社会が遂に自らを社会として認識するようになれば、人類は遂に、自らが精神という自己超越的・自己判断的総体であることを認識できるようになり、それによって、自らの本当の姿をとり始めるようになるであろう。このとき国際社会は、人類が、自らが人類であるということ、人間であることとはどういうことなのか、そして、すべての人間に共通して認められる(生物)種としての固有の特徴について、(繰り返し)発見し再発見する場である文化となるであろう。」(下線による強調箇所は原著者。傍点による強調箇所は本著者)⁽¹⁶⁶⁾

生起しつつある国際社会の心としての国際意識(international consciousness)は、文化を含む社会基盤によってその成立と成長が促進されるであろう⁽¹⁶⁷⁾。すなわち世界の共通の文化を形成することは、そこに個々の文化の価値を見出すだけではなく、国際意識の形成を促し、国際社会の社会としての覚醒に貢献するであろう。アロットは次のように説明する。

「国際経済を通じて、コミュニケーションの手段としてのマス・メディアを通じて、そして人の移動を通じて、社会的現実は今や、地球大気圏の気象系と同様に、世界の意識の中において氾濫するようになった。……言葉・観念・理論・価値は世界中を移動し、何千もの非公式チャンネルを通じて人間の意識の中へと流入している。一層多くの世界の人民が同じ唄を歌うようになりつつある。またその唄は、世界の人民が母親の膝の上でも、また学校の教室でも学んだことのないものである。想像力及び理性は、全人類の共有遺産(common inheritance of all human beings)であるが、これらは全人類の共通の経験、すなわち、国際意識なるものを生み出しつつある。」(傍点による強調箇所は本著者)⁽¹⁶⁸⁾

(166) *Id.* para.18.75.

(167) *Id.* at xx (『ユーノミア』26-27頁。). 公共心については、前掲注(35)を参照。

(168) *Id.* para.15.79.

5 アロットの文化概念の批判的考察

これまでアロットの『ユーノミア』に示された文化概念について紹介した。本章では、①アロットの文化概念の前提としての国際社会論（本章5-1）、②文化概念（本章5-2）、③文化とグローバルな資本主義の関係（本章5-3）という視点から、簡単に考察をする。

5-1 アロットの国際社会論について

本節ではアロットの文化概念について検討する前提として、アロットの文化以外の国際社会に関する議論について必要な範囲で考察する。

アロットは、①国際社会と国内社会が現実には二重性を有しており相対化されていないことを出発点とし（現実には国家には特権的地位が認められる）、②あらゆる社会を成立せしめる一般的な社会論の分析枠組み（基本構制や社会の意識はその中心的分析枠組みの一つである）の構築を構想しつつ、③その枠組みによる主要な批判を、国際社会となれず分断されたままの国際非社会に向けている。それゆえ、アロットの議論は国内類推（ドメスティック・アナロジー）であることがわかる。アロットの議論の特徴は、特に②の社会論一般に関する分析枠組みの部分であり、この箇所が難解である。

このようなアロットの国際社会観と、本稿で論じてきた国際社会における文化の欠落と空白とは表裏の関係となる。

ここで注意すべきことは、アロットの議論からすれば、「国際社会に中央集権的権力が存在せず、国際社会の構造及びシステムが、国内社会のそれらと分離されていること」（すなわち国際社会の分権的性質）だけが、アロットの議論の本質ではないことである。むしろ①アロットが想定した社会の意識や心（公共心を含む）という概念を前提とした「社会が統一的意識を有し、それによって社会が自己構制する」という仮説や⁽¹⁶⁹⁾、②「国家から構成される社会を超

(169) 前述1-2及び1-3を参照。

越した、人類から構成される国際社会が存在しうる」という命題⁽¹⁷⁰⁾の当否こそが検討されねばならない。

本問題は重要な問題であるが、本問題の検討のためには、アロットの社会論全般の分析が必要であり、アロットの文化概念の範中では議論が収まりきらないため、ここでは問題点の指摘にとどめたい。

5-2 アロットの文化概念について

次にアロットの文化概念が問われねばならない。アロットは、無意識を含む意識に社会形成上の特別な地位を与え、これが社会の成立と相互に関係するとしている。社会の精神である文化は、これら社会の意識とは重複部分を有するものの概念としては区別され、社会の形成や変遷とは分離された自律性と継続性を想定している⁽¹⁷¹⁾。特に文化の本質を社会の精神とするアロットの文化観は、意識による現実形成に還元しえない部分を有する特殊な存在として文化を扱っていることを示す。

我々が文化を論ずる際の困難は、文化概念が持つ多義性・多様性にあるといえる。それゆえ、アロットが文化的現象の整理を行い、文化概念の本質を社会の精神に限定して検討したことは示唆的であり参考となる。

国際社会の精神としての文化が有する全体性・自己超越性・自己判断性という特性は⁽¹⁷²⁾、国際社会を分析するための概念であるのと同時に、国際社会が獲得することが期待される性質という意味でアロットの希望を示すものである。アロットが精神としての文化についてこれらの特性を認めていることは、国際非社会という現状を克服するにあたり、文化が相応の役割を果たすべきことを彼が期待していることの証左ともいえる。

もともと我々の知る文化は、必ずしも社会の精神に限定されるものではない。たとえばアロット自身も言葉が意識の秩序化において重要な役割を果たしてお

(170) 前述 4-1 を参照。

(171) 前述 2-1 を参照。

(172) 文化が有する特性については、前述 2-2、2-3、2-4、2-5 を参照。

り、社会の発達に伴い変化することも認めているが⁽¹⁷³⁾、言葉は広義の文化に関連するものである。言語を含む文化は、国家や関連団体による政策によって少なからず影響を受ける。アロットは意識による現実形成の文脈でこれらを論じているため、我々が知る文化は、一方では意識を超越した社会の精神を示し、他方では意識による秩序化の一翼を担うこととなる。

アロットの議論では文化の存在が社会の成立に付随するものとしてア・プリオリに措定されているが、この文化の形成を社会の形成との関係で説明する必要がある。特に歴史の試練に耐えた社会の精神として誰もが賛同するであろうハイ・カルチャーが文化であるだけでなく、資本主義によって生み出された文化や、部分社会における文化であるサブ・カルチャーも存在し、これらもハイ・カルチャー化することもある。文化の動的な形成に関する説明が求められている。

さらにアロットの主張は、「現在の誤って認識された国際非社会は社会ではなく、そこにおいて文化は繁栄することはできない」というものである⁽¹⁷⁴⁾。文化が社会の精神であるとするアロットの文化概念からすれば⁽¹⁷⁵⁾、国際社会が成立していない以上、国際文化も成立しないのは当然の帰結である。国際社会を有しない我々は「国際社会の文化とは具体的には何か」という問いに対する回答もいまだ有していないこととなる。

5-3 文化とグローバルな資本主義の関係について

国際社会における文化の空白をグローバル化した資本主義という偽文化が埋めているとのアロットの指摘については⁽¹⁷⁶⁾、多くの論者が賛同するであろう。この説明は、「グローバルな資本主義によって文化が損なわれることがなぜ問題であるのか」という問いに対して、グローバルな資本主義が損なっているも

(173) 前述 2-1 を参照。

(174) 前述 3-1 を参照。

(175) 前述 2 を参照。

(176) 前述 3-2 を参照。

のが国際国内を問わず社会を示す精神そのものであるとの一つの回答を提示している。

アロットは、国際非社会において社会化されておらずコントロールされていない資本主義が与える害悪を批判する⁽¹⁷⁷⁾。しかしながら、アロットの主張は決して反資本主義ではない。世界に同じ唄が流れていることは⁽¹⁷⁸⁾、グローバルな資本主義の成果でもある。アロット自身も小説という形態で自らの思想を表現している⁽¹⁷⁹⁾。それゆえアロットは資本主義そのものが問題なのではなく、国際社会において資本主義がコントロールされず社会化されていないことこそが問題であるとしている。

アロットは国際社会が成立すれば、資本主義のコントロールは可能であると考えているようだが⁽¹⁸⁰⁾、来るべき国際社会において具体的に統制する方法については詳述していない。これは国内社会において資本主義が統制されてきたという歴史的経験に基づくものであるかもしれないが、この主張の妥当性も今後検討されねばならない。

国際社会が再度成立した際には、国際社会の文化形成に資本主義が貢献するであろうが、その際には文化と資本主義の関係ははたしてどのようなものになるのであろうか。アロットの『ユーノミア』での議論の先を検討する必要がある。

おわりに

本稿では、アロットの『ユーノミア』の文化概念に焦点を絞って説明と考察を行った。

アロットの指摘の延長にあるはずの、我々が有していない「国際社会の文化」

(177) 前述 3-2 を参照。

(178) 前述 4-2 を参照。

(179) たとえばPOWER 1及びPOWER 2を参照。

(180) もっともアロット自身も資本主義の統制の困難さを認めている。EUNOMIA, para.18.31.

とはどのようなものなのか、我々はいまだイメージを持つことができない。このような高度な抽象性ゆえの主張の不明瞭さは、文化に限らずアロットの議論全般についていえることである。それゆえ、本稿で明らかとなった課題については、アロットの他の著作も含めた分析・検討を通じて今後解明してゆきたい。

【謝辞】

本稿執筆にあたっては、尾崎重義先生（筑波大学名誉教授）が主催されている「ユーノミア研究会」での議論から有益な示唆を受けている。ここに深くお礼を申し上げる。

なお本稿で用いた『ユーノミア』の翻訳もユーノミア研究会において行われたものである。ただし本稿で展開したアロット解釈は、同研究会で共有されているものではなく、本稿中での誤解・誤訳等は著者個人の責任に帰するものである。

【付記】

本稿は、①財団法人日本証券奨学財団・研究調査助成（平成22年度（第37回）「国際社会の文化遺産保護のための、国際法を中心とする学際的研究」（研究代表者：大沼保昭（明治大学法学部特任教授））及び②アジア国際法学会日本協会の研究プロジェクトへの助成（2011年度）「文化遺産の国際的保護：国際法を中心とする学際的アプローチ」（研究代表者：鈴木淳一）による研究成果の一部である。